京都御苑ニュース

冬

教育のフィールドとしての京都御苑の重要性

深町　加津枝

京都御苑からみえる雪の大文字

大文字の山を登り京都の市街地を見下ろすと、三山に囲まれた歴史都市、京都の緑の様子が一望できます。気がつくのは、市街地の中に点在する緑の中で、ひときわ目立つ京都御苑の存在です。「緑地計画学」という大学の授業では、京都の緑地の現状を理解するため、まずは、身近なフィールドである東山に、そして、京都を代表する緑地である京都御苑を訪れることにしています。

都市中心部のまとまった緑地として京都御苑が果たしてきた役割は計り知れません。例えば、京都御苑の面積は六十三haほどですが、生育する植物は五百種を超え、オオタカやアオバズクが訪れる場となっています。歴史の紐を解くと、今日の京都御苑の緑は、明治期以降の植栽におうところが大きいのですが、造園のプロによる絶え間ない手入れの積み重ねと、自然そのものに対する敬意とが重なり合って豊かな自然環境が育まれてきたといえましょう。

授業では、主に都市に位置する孤立した緑地および構成要素となる植物の特徴、管理方法に関する理解を深めることを目的にしています。参加する学生の多くは、訪れるまで京都御苑の緑地について漠然とした印象しかもっていませんでしたが、スタッフの方々のお話しを聞きながら、じっくりと緑に触れる中で、実感を持って緑地の重要性を理解していきました。閑院宮邸跡にある京都御苑の自然や歴史に関する展示、「京都御苑歴史ふれあいの道」の仕掛けなども、よい教材となっています。

閑院宮邸跡収納展示室

授業に参加した学生の感想をいくつか紹介したいと思います。「山間部に行けばもっと多くの緑が広がっているだろう。しかしそこまで足を運ぶのはなかなか難しい。都市の真ん中に存在するこの京都御苑は地域と密着しており、日常的に利用されている。人にとっても生物にとっても利用しやすい場、それがこの京都御苑だと思う。三方を山に囲まれた京都の中心に存在する緑は、人と生物の接点となっていると思う。」。「京都御苑には樹齢六百年を超えるといわれるクスノキをはじめ、ケヤキ、エノキ、イチョウなどの巨木があり、京都の歴史の深さを体現している。長い歴史を経て形成された景観は圧倒的な存在感を醸し出している。巨木が多いことで、周囲に立つビルが御苑内から見えるのを多少軽減する効果もあるようだ。」。「授業を受けるまでは植物の名前もほとんど知らず、都市の中の緑の価値を考えることもなかったが、植物をみて美しいと感じるようになった。すべては経験することに価値があると思う。すべての人が自然環境保全の論理を理解するのは困難かもしれないが、植物を見て気持ちを表現することはできるだろう。京都御苑には多様な植物があり年中行事も行われ、都市にいながら四季を感じることができる。自然の豊かさを経験することにより、一人一人の意識が変わるのではないかと感じる。」。

京都御苑内にある宗像神社のクスノキ

このように、京都御苑の歴史に裏打ちされた緑に触れることで、それぞれの学生が身近で貴重な自然や文化に向き合う契機となり、都市の中の緑の大切さを感じとっていました。教育のフィールドとしての京都御苑の価値と魅力を改めて見直し、教育の場としてさらに活用されることを期待しています。

（京都大学准教授）

自然保護憲章

自然をとうとび、自然を愛し、自然に親しもう。
自然に学び、自然の調和をそこなわないようにしよう。
美しい自然、大切な自然を永く子孫に伝えよう。

自然はわれらを　われらは自然を

絶えまない人と自然の連携を象徴するメビウスの連環。これが息の長い活動が期待される自然保護のシンボルマークに表現されています。

発行人
〒602-0881　京都市上京区京都御苑３番地
☎075-211-6364
財団法人　国民公園協会
京都御苑　木村博司
編集
白川書院
監修
環境省京都御苑管理事務所
本紙は再生紙を使用しています。

冬の野鳥

中西　甚五郎

京都御苑では、年間を通じて約百種の野鳥が観察されています。冬は、樹木が落葉し野鳥の姿が見やすくなるうえに、留鳥の他に冬越しにやってきた野鳥が見られるので、バードウォッチングに適した季節の一つです。

それでは、観察ポイントを幾つかあげてみましょう。

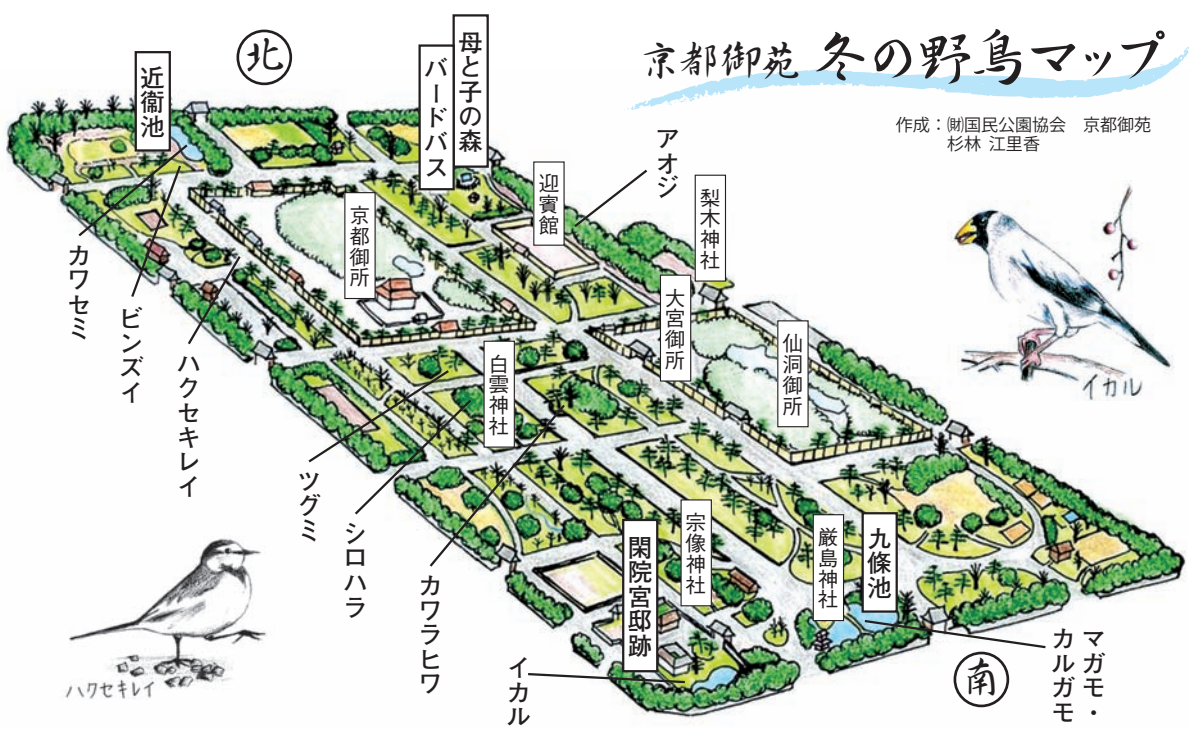
まず、最も観察しやすいのは、母と子の森のバードバスです。バードバスは一㎡に満たない切石を数段組み合わせ、そこに小さなくぼみを作った小さな水場ですが、人気のスポットです。お馴染みのシジュウカラやメジロ、人懐っこいヤマガラ、冬越しにやってきたアオジやビンズイ、シメなどが代わる代わる水浴びや水飲みにやってきます。観察していると季節や時間帯、天候により、よく来る時間と来ない時間があるのがわかります。

次に、草地に目を移してみると、足を交互にだして歩いているビンズイや、数歩歩いては胸を張る姿が特徴のツグミが目立ちます。また、砂利敷きの苑路では、冬鳥のハクセキレイが見られますが、よく似た留鳥のセグロセキレイもいるので色合いや鳴き声などの違いをよく観察しないと見間違いそうです。御苑の外周林沿いや神社周辺などの樹林では、落ち葉をひっくり返しミミズなどを探しているシロハラや鶺鴒と言われているトラツグミ、ルリビタキやアオジなどが見られます。樹上では、イカルがパチパチとエノキやムクノキの種を割る音が聞こえてきます。稀にシメやコイカルが混じっている時もあります。

その他、樹木の枝先ではキリコロコロビィーンとカワラヒワが鳴き、九條池や近衛池などでは、マガモやカルガモなどのカモ類やカワセミなどの水辺の野鳥が見られ、閑院宮邸跡の池には、イカルの群れが朝早く水を飲みにやってくるのは壮観です。

是非、冬の御苑でバードウォッチングを楽しんでみてはいかがでしょう。

（京都御苑管理事務所　庭園科長）



樹木からの贈り物

西台　律子

写真①　ナンキンハゼをついばむコイカル

京都御苑では色とりどりの樹木が美しい秋を演出します。そして、豊かな木の実が多くの小鳥たちを呼び寄せます。厳しい冬を乗り越えるためにはるか遠くシベリアからも渡ってきます。御苑ではおなじみのイカルの群れに混じって数羽のコイカルがエノキやアキニレ、ナンキンハゼの実をついばみにきます（写真①）。コイカルは、主に朝鮮半島や中国北東部から渡ってくる冬鳥です。

野鳥の食性については、一九九二年より二〇〇八年までに確認できた種を京都御苑自然現況調査報告第六集に記載していますが、実に多くの種類の植物を活用していることに驚きました。予想では、カラスが最も多くの草木を利用しているものと思っていました。ところが、一位は意外にも愛らしい小さなメジロだったのです。メジロは、サザンカやヤマザクラなどの蜜のほかケヤキ、シャリンバイ、サンゴジュなどの木の実（写真②）など合計四十四種もの植物を利用していることがわかりました。第二位はヒヨドリの三十三種で第三位のハシブトガラス

写真②　サンゴジュをついばむメジロ

二十三種より十種も多くの種類を利用していました。メジロもヒヨドリもカラスもよく鳴き交わしながら餌の情報を伝え合っています。単独で越冬している個体より情報を的確に伝えられることも上位を占める理由となっているのでしょう。カラスを追い抜いた原因は、メジロとヒヨドリのくちばしにもあります。どちらも細くて長く蜜を吸うのに適しています。蜜を吸えるという点でより有利になったというわけです。でも、昆虫、カエル、ザリガニなどの生き物も含めると、とてもカラスにはかなわないでしょう。カラスの食性は驚くほど多様だからです。

庭に鳥を呼び寄せる木を植えたいという相談をよく聞きますが、それも第六集に掲載しています。第一位はモッコクでコサメビタキやムギマキ、キビタキ、コゲラ（写真③）など二十九種もの小鳥が熟した実をついばみにやってきました。キツツキの仲間は昆虫やその幼虫などを主に餌としていますが、二〇〇〇年にほぼ毎日、モッコクの実がなくなるまでコゲラがついばみにやってきたときは、とても愉快でした。

第二位は、ムクノキで二十六種もの野鳥がついばんでいました。ムクノキはわたくしが幼小のころ苑内でおやつとして毎日拾いにきていたくらいですので、干し柿とブルーベリーを混ぜたような美味です。なぜ一位にならなかったのかが不思議です。

写真③　モッコクをついばむコゲラ

第三位はエノキです。アオゲラが連日ついばみにやってきたこともあります。野鳥の写真を数多く撮りたいときは、黒っぽく熟したエノキの実の近くで待つことにしています。あるときには、ジョウビタキ、ツグミ、イカル、コイカル、メジロがやってきてシャッターチャンスに戸惑ったこともあります。野鳥観察も小鳥たちの好む樹木を知っていれば、うまく出会える可能性も高くなるというわけです。これこそバードウォッチングの秘策といえます。

苑内の小鳥たちは、樹木からの贈り物をしっかり受け止め、お礼に糞をばらまき、新しい芽が育つ手助けをしてくれます。まさに御苑の森の拡散に一役かっているというわけです。

（京都自然観察学習会）

催事案内

■平成21年京都御苑自然教室

一般の方を対象とした自然教室の今後の予定は、下記の通りです。都市の中では貴重な緑をもつ御苑で、冬の自然を観察しましょう。

冬の自然教室“冬の御苑にふれよう”

平成22年1月17日（日）　9：30～12：00

主　催　環境省京都御苑管理事務所
㈶国民公園協会　京都御苑

内　容　京都自然観察学習会の先生方に指導して頂きます。冬の御苑にはどんな草花やキノコがあり、どんな虫や鳥たちが生活しているか観察します。

集合場所　京都御苑　閑院宮邸跡前
（京都御苑南西角 間之町口）

受付方法　当日、集合場所に午前9:30までにお集まり下さい。

参加費　無料

その他　筆記用具をご持参下さい。手持ちのルーペ、双眼鏡、図鑑などの観察用具があれば便利です。

＊以降も春、夏、秋、冬と四季折々、自然教室を予定しています。

問い合わせ　京都御苑管理事務所　TEL 075（211）6348
㈶国民公園協会京都御苑　TEL 075（211）6364

写真で見る京都御苑

～過去との出会いと新たな発見～

京都御苑の写真展を開催します。
御苑の自然や歴史などの見どころ、職員だから知っている御苑の魅力を写真で紹介します。
大正・昭和初期に撮影された苑内の写真も展示します。

日時　平成22年1月19日（火）～3月14日（日）（月曜休館）
9:00～16:00（16:30閉館）
場所　京都御苑内　閑院宮邸跡レクチャーホール（御苑南西部）

主催　環境省京都御苑管理事務所
協力　宮内庁京都事務所、皇宮警察本部京都護衛署、内閣府迎賓館京都事務所、㈶国民公園協会京都御苑

御苑の花暦

和名	開花期	主に見られる場所
サザンカ	11月～2月	乾御門から今出川御門に抜ける散策道周辺
ウメ	2月中旬～3月中旬	梅林
ヤブツバキ	2月～4月	近衛池周辺、母と子の森白雲神社周辺

会員募集

財団法人国民公園協会　京都御苑

年会費

●普通会員　1,000円以上
●賛助会員（会社・団体）　10,000円以上

会員への特典

1. 葵祭、時代祭の招待券を進呈します。
（ただし、普通会員は会費4,000円以上の方に限ります。）
2. 本会発行物をそのつど送付します。

■申し込み、問い合わせ先

㈶国民公園協会　京都御苑
住所　京都市上京区京都御苑内
〒602-0881　TEL 075（211）6364

冬の一景

鳥居　万恭

雪で書かれた大文字を背に清和院御門をくぐり抜けます。左手には仙洞御所の築地塀が矢の射るがごとく、直線を描いています。足元を見ると、淡く積もった雪が早くも溶け出し、朝一番につけられた足跡も少しづつ消えていきます。京都御所に向かってしばらく歩くと右手に駒札「土御門第跡」があります。その昔、このあたりに関白太政大臣藤原道長が住んでいました。駒札の小さな屋根にも淡雪が積もっています。周りを見回しながら駒札の文面を読みだすと、雅楽の音が聞こえてくる錯覚に陥ります。いつの間にか見たこともない、道長の大邸宅が霞んで見えてきます。道長が歌を詠む声も響いてきます。「此の世をば我が世とぞ思う望月の欠けたる事も無しと思へば」、酒を酌み交わす音、衣擦れの音も風に紛れて聞こえてきます。約一千年前の世界が、今もそこにあるようです。

松から落下した雪の音で気がつくと、粉雪が舞い降りています。作業衣の襟を立て、しばらく歩くと京都御所の南東の角に出ます。目の前に建春門があります。かつては日御門と呼ばれ内侍所への入り口でしたが、近世からは皇后が出入りされる門になります。おもむろに近づき、下から眺めれば美しい圧迫を感じます。御所六門のうちではもっとも外観が華やかと言われていますが、雪が加わった情景はさらに、王朝の世界を浮かびだします。北を向くと遠目に真っ白な北山が見えます。多くの公家達がこの地から雪の北山を眺め歴史を刻んでいった事でしょう。皇女和宮の生家、橋本家も数十メートル先にありました。開国か攘夷か、運命に翻弄されながら公武合体によって皇女和宮は十四代将軍御台所として降嫁します。橋本家の建物もすでになく、雪化粧をした草地だけが迎えてくれます。現在の御所が＊里内裏から内裏になるのは南北朝時代が終わる一三九二年の事です。光厳天皇時代（一三三一年～一三三三年）から里内裏であった土御門東洞院第が御所になるわけです。当時と変わらない「比叡おろし」の風が粉雪を撒き散らしながら通り過ぎていきます。

冬の清和院御門

＊里内裏とは内裏の外に臨時に設けられた皇居

（㈶国民公園協会　京都御苑）